

### 3.4 学歴と職業

・まずは、本当に学歴がお金の面でそれに見合うだけのものを与えているか否かを検討する。

・学歴と給料・・・以下のデータを見ると、女性は学歴による給与格差が著しいが、男性の場合は高卒と大卒で2千万円違うだけである。しかし、大学の4年分の授業料よりは生涯給与の差の方が大きい(ただし授業料以外に仕送り分等入れると、たいして大卒は得ではないかもしれない)。ただし、受験のための金銭的投資や子ども自身の遊ばずに勉強した時間と併せてそれに見合うだけの見返りがあるか否かは個別に検討の余地があるのかも知れない。さらに大企業と中小企業の差の方が大きいので、高卒・高専卒で大企業に入れば、金銭的には大学に進まない方が計算上は得にもなりうる。

・性別・学歴別生涯給与(退職金を除く・新規学卒で定年まで転職をしなかった場合)

男性 中卒 2.2 億円、高卒 2.7 億円、高専・短大卒 2.6 億円、大卒 2.9 億円

女性 中卒 1.6 億円、高卒 2 億円、高専・短大卒 2.2 億円、大卒 2.7 億円

男性大卒大企業(1,000人以上) 3.3 億円

男性大卒中小企業(10-99人) 2.4 億円

出典; 『ユースフル労働統計 - 労働統計加工指標集 - 2005』(独立行政法人労働政策研究・研修機構) <http://www.jil.go.jp/kokunai/statistics/kako/documents/2-23.pdf>

・日本社会において学歴による給与の差がさほど生じないのも、先に3.1で述べたような、ジニ係数の小ささにもよるのかも知れない。

・結局、大学の授業料だけの出費なら大卒の方が投資効果はある。それに中学高校と塾通いさせるか家庭教師をつけると、その出費も加わるので、やや投資効果があることになりうか。他方、私立中高に通いさらに家庭教師でも付けるとほとんどプラマイゼロになるかも知れない。しかも遊ぶべき時間に無理矢理勉強をさせられた勉強嫌いの子どもにとって、その勉強時間もある種の労働、それも「強制労働」であるとすれば、その学習時間も「出費」に入れられるとも考えられる。

・当然、上記のデータには大学のランク付けは反映されていないので、平均的なレベルの大学であれば、授業料以外の投資はほとんど不要であると考えれば、やはり大卒の方が得ということになる。

・さらに「人はパンのみに生きるにあらず」というか、学歴による金銭面での差はさほど大きくなくても、権限の差は大きいことが想定される。高卒と大卒では勤続年数に4 - 5年の差があるのに、この数字であるので、勤続年数が同じであるとすれば、差はもっと広がる。つまり大卒の方がそれだけ出世が早く、それに応じて部下も多く、責任のある仕事を任されていることは、大卒のメリットとしていえる。

・つまり「労働」という生活のためだけの仕事から、「職業」という生き甲斐に関わる仕事に転化させるためには、料理、芸能、スポーツその他特別の才能には恵まれていない人々の場合、学歴を得ることが効率的であると考えれば、学歴を得るための投資というのまさ

ほど悪い投資ではないともいえるであろう。

・また「学歴」は、人々の「地位」（社会的な位置づけ・ポジション。「収入」も「地位」の重要な構成要素であると一般に考えられる）獲得の手段であるとともに、「学歴」それ自体が一つの「地位」の構成要素ともなる。

・そこでこの「学歴」自体の「再生産」戦略に占める位置づけをみるために、ブルデューの教育論に触れておく。そのあと、日本固有の文脈で、ブルデュー的問題関心を考えようとした著述であるとも考えられる苅谷剛彦『大衆教育社会のゆくえ』（中公新書、1995年）をみってみる。

・現代フランスの代表的社会学者、ピエール・ブルデュー（1930-2002）の「階層再生産」の議論（ブルデューについては邦訳を多く出している藤原出版のHPに、彼の経歴や多くの著書の目録等の情報が、出ている <http://www.fujiwara-shoten.co.jp/book/bourdieu.htm>）。

・よい学歴（学校歴）のある人のディスタクシオン DISTINCTION（卓越化<distinguish）の構成要素

1．能力そのものの差（頭の良さ、努力の結果の差）

能力・・・専門的能力の差、一般教養の差、

それに立ち居振る舞い（ハビ투스 habitus<have, habit）の差（文化資本）・・・芸術に接し、上流らしい振る舞いを身につけると、「高次の判断力、難局に直面した際、高い見地から、事柄に対して距離をもって臨める」と、世間では思われる。

ハビtusとウェーバーのエートス概念との類似性にブルデュー自身が言及（恩師のレイモン・アロンがフランスでは数少ないウェーバーのシンパであったという）。ブルデューの写真論について

2．周囲の評価の差

3．ネットワーク、人脈の差（社会資本）

・高学歴、高地位（支配階級）の親の戦略・・・子供に対する階層再生産戦略を施す。要するに、親と同じ高評価の学校に行かせて、それ相応の教育を受けさせて、よい就職をさせて、よい地位につけようと試みる。つまりは教育投資を行う。

また学校教育が、子供に求める能力は、支配階級の好む文化によって育まれてきた知識や教養であるので（正しい言葉遣い、正しい趣味・・・クラシック音楽、抽象絵画、純文学）、支配階級の文化に身近に接して育った子供は、学校教育に、ついていきやすいし、入学者選抜で高得点を獲得しやすい。。

・その結果

1．学歴が階層流動化の要因にならなくて、階層再生産の道具としてのみ機能するようになってしまう。（学歴が属性価値か達成価値かということにも関係する）。

・・・職業の世襲を他人に納得させる根拠づけとして、学歴というタイトルが利用される。優秀な家庭教師をつけて。

2．同じ一流とされる学校の卒業生において、親が一流の職業に就いている人の方が、早

く高い地位に就ける。

学歴が専門的能力の証明であるよりは、教養の高さ、文化資本の伝達・授受の証拠に使われる。

・これに対して日本でもいえること。いえないこと。

1．東大・早慶の学生の親の年収が他大学より高く、特に東大が高い。また慶応と東大の隔世遺伝？もよくいわれる。慶大生の親は東大卒が多く（私の場合も）、東大生の親は慶大卒が多い（芸能界でいえば市川猿之介と香川照之）。あるいは、中央の政治家の息子のほとんどは早慶や東大に行っている。

2．日本では、階層の格差がフランスなどに比べ少ないという説と、日本でも階層の格差があるという説がある。少なくとも収入の格差は少ない方である（「9割が中流意識」。また日本は「地位の一貫性」が弱い社会ともいわれる。他方で「資産格差」はむしろかなりあるという指摘も多くなされてきた。また去年は「下流社会」をタイトルに含めた著書が話題になったりして、その意味でも日本の「中流社会」が過去の神話になりつつあるのかもしれない）。

3．日本において芸術等の趣味という意味での文化資本のあるなしは、社会的地位に関係しない。なぜなら、日本の古典芸能は、江戸から明治への社会意識の断絶によって、大多数の人から縁遠い存在となっている。むしろ絵画にしても音楽にしても西欧の古典が、より身近であるが、しかし自分たちの文化や伝統に根ざしたものではないので、それらもさほどファンが多い訳ではない。日本の一流大卒（インテリ層）の大半は、高齢者は演歌・歌謡曲、若者は J-POP という点で、他の階層と同様であり、階層による趣味の違いよりは世代による違いの方が著しいようである。その大きな理由は、江戸時代と明治との大きな断絶にあるものと思われる（この3．の話はブルデュー絡みの部分以外は私の慶大時代、瀬木慎一という美術評論家の先生が非常勤講師としていっていた話し）。

文化資本 capital culturel

ブルデューおよびパスロンの用語で、文化の持つ社会的な価値の側面、親から子へと相続される側面を強調した用語。例えば、流暢に標準語を話せること、クラシックピアノを上手に弾けること、といった技能は、学校教育や、就職活動や、その他社会生活の様々な側面において、有利であったり、敬意を表されたりするであろう。こうした技能は、家庭生活の場面を通じて、親から子へと受け継がれる場合が多く、文化資本をより多く持った家の子供はやはり有利な立場に身を置くことができる。ブルデューはこうした問題を『再生産』で論じている。また、文化資本は必ずしも金銭的な資産に比例するものではなく、経済資本は豊かであるが文化資本に乏しい人々も、経済資本はあまり豊かではないが文化資本は豊富な人々も、存在し得る。ブルデューはさらに文化資本の中身を、身体化された様態（話し方や立ち居振舞いなど）、客体化された様態（物としてのピアノや百科事典など）、制度化された様態（学歴や資格など）の三つに分類した。

ブルデューの議論はフランス、ヨーロッパ型の階級社会を前提としているので日本にそのままの形ではあてはまらないが、それに類するものは日本でも存在していると考えられる。（田畑暁生編『情報社会を知るクリティカル・ワークズ』（フ

イルムアート社、2004年)(私も執筆に参加している本)での「文化資本」の項目)

・ 荻谷剛彦『大衆教育社会のゆくえ』(中公新書、1995年)は、以下のような問題関心で書かれている。荻谷は「日本は学歴社会である」(この場合の「学歴」は「学校歴」も含めた包括的な概念)という言説が、神話として機能してしまい、多くのタブーや偏ったものの見方を日本の教育学会や教育界にもたらしてしまったという。そのような「日本は学歴社会である」という神話によって、大事な問題が人々から見えなくされてしまったという。それは階層文化あるいは階層再生産といったブルデュー的な問題が日本にも形を変えて存在していたにもかかわらず、日本では反学歴社会というイデオロギーが教育界の前面にでていたため、平等な教育が公教育で施され、能力別の学級とかは公立学校においては一時期をのぞいてほぼなかったし、先述のように文化もエリート文化のようなものはなかったので、「階層文化の可視性」というようなことはなかった。

また学歴エリート自身も、「日本は学歴社会である」というイデオロギーのなかで育ってきているので、エリートらしい立ち居振る舞いをしないことを美德としてきた。

しかし、現実には、戦後一貫して、一流大学の出身者は、親もそれなりの学歴をもった人の比率が高く、日本においても可視化できないものの「階層文化」はおそらくは存在するし、エリート階層は再生産されるという意味で「階層再生産」は存在するというのである。

つまり日本は学歴社会であるという神話が、学歴による不平等を批判することばかりに向かい、それは学歴さえあればエリートになれる社会であるという神話と裏腹になっており、結果的に学歴による階層再生産の問題を見えなくするというか、それらを免責する機能を果たしてしまっているということなのである。

・ 荻谷によると、1950年代までは学歴と経済的な貧困の問題との関係は日本でも明確に意識されたという。「高度経済成長以前の一九五〇年代の日本社会においては、貧富の差という社会の階層性が目に見えるかたちで存在していたということである」(荻谷 1995 37)。ところが高度成長期を経て、貧困によって勉学をすることが困難な子供が減ってくると同時に、「9割が中流意識をもつ」というような一見平等な社会が実現するため、社会の階層性が目に見える形でなくなってしまうというのである。つまり以下に引用するような大衆教育社会が、高度成長期以降の日本では存在して、それで階層が目立たなくなっているというのである。「大衆教育社会には、階層的、人種的な断絶、断層といったものが目立たないという「質的」な特徴が備わっている。あるいは、大衆教育社会とは、そうした断層を問題にしにくい社会であるということが出来る。特定の社会階層に属する人びとだけが教育を求めるのではない。どの階層に対しても教育が開かれており、また、階層によらず、だれもが教育に高い価値を置いている - - そのようなイメージが定着している社会として、大衆教育社会を描くことができるのである」(荻谷 1995 13)。

このような大衆教育社会であれば、平等な教育機会が開かれているかのような幻想を

人々に与える。つまり努力すれば誰でも一流大学に入り、一流企業に入り、そして努力すればそれ相応の地位に就けるというメリトクラシーの感覚が日本では大衆化・共有化されていた（苅谷 1995 21）というのである。

現実にはそれなりに教育機会の格差は存在する。なのにこのような大衆教育社会の神話が現実の格差を見えづらくしている。「しかしながら実際には、依然として教育機会の格差が存在する。・・・親の学歴や職業によって、どの段階の教育まで受けられるかには明瞭な差異が存在する。にもかかわらず、そのような格差が、教育問題の中心課題として、政策レベルの議論に反映することはほとんどなくなってしまった。それはなぜなのだろうか。どうして教育における不平等は社会問題とみなされることがなくなったのか。社会階層間の教育機会の格差を問題視しない土壌はいかに成立したのか」（苅谷 1995 15）。

・そして能力平等主義によって、努力すれば誰でもいい学歴を付けられるし、いい学歴を得ればいい地位を得られるという神話が蔓延したために、誰にでも同じ教育を求める運動へと繋がり、結果として、皆が同じ土俵で競争し合う、受験競争の激化を、能力主義教育を批判することで、逆説的にもたらずという状況が見られるという。「能力主義教育への反発から生まれたこのような能力＝平等主義の考え方は、学歴社会が前提としていた、教育による「生まれ変わり」という主張と重なり合っていたのである」（苅谷 1995 190-191）。

・要するに学歴が職業を規定し、学歴を要する職業が威信が高いという人間社会の状況は、情報、知識が肉体労働を支配するという、ホワイトカラーや官僚制の議論とも結びつく問題として捉えられる。

・その点で、学歴による生まれ変わりという苅谷が析出した「神話」はある意味で、「神話」というよりも、ある時期あるいはある局面においては「真実」を語っている部分もあったといえる。しかし学歴で生まれ変わるのは、第1次産業から、第2次、第3次産業への生まれ変わり、あるいはブルーカラーからホワイトカラーへの生まれ変わりという部分についてのみ妥当するとも言える。ホワイトカラー同士の差、ミドルクラスと資本家・経営者階級との差、という問題は、「学歴による生まれ変わり」の「神話」では解決しない。要するにブルデュー流の階層再生産がそこに介在する。しかも、そのような階層再生産の問題を「生まれ変わり」の「神話」は見えなくさせる機能も有している。本講義の全体の議論と苅谷の議論とをあわせると、以上のようなストーリーとなるであろう。

・つまり生まれ変わりの神話がきちんと機能する局面あるいはその局面における機能する理由は何かと問われれば、多分に食糧自給率が先進国でも特に低い、我が国の農業の実情が、都市化やホワイトカラーの増大をもたらしてきた、明治以降の近代化の特殊な（都市かと都市への人口集中は近代国家にある意味典型的なことではあるが、極端にまで進んでいるという点で「特殊な」）形態があるのであると推察される。それともう一つは科挙制度などの歴史を知っている東アジアの特殊事情もあるのかも知れない。